

鈴木おさむさんといえば、数々の人気バラエティー番組やドラマを手掛ける人気放送作家です。女性の本音が詰まった映画『ラブ×ドック』では、脚本のみならず監督にも初挑戦。アスミック・エースや当社も製作に参加したこの映画の魅力や見どころを語っていただきます。また、家族に対する思いや仕事の取り組みなどについても伺いました。



放送作家・映画監督

自分のフィールドを拡大し
さまざまな人と対話することで
今のトレンドが見えてくる

鈴木おさむさん

インタビュー



非鉄金属原料部
平木場 夏愛さん



住友商事ケミカル
張 東輝さん



編集委員
原田 絢子さん

(すずき・おさむ) 1972年生まれ。千葉県出身。大学在学中に放送作家としてデビュー。多数の人気バラエティー番組の構成を手掛けるほか、ベストセラーとなった『ブスの瞳に恋してる』などのエッセーや小説の執筆、ラジオパーソナリティー、舞台の脚本・演出など多岐にわたり活躍。脚本を手掛けた代表作は、映画では『ハンサム★スーツ』(2008)、『ONE PIECE FILM2』(12)、テレビドラマでは『人にやさしく』(02・フジ)、『生まれる。』(11・TBS)、『奪い愛・冬』(17・テレビ朝日)など多数。

変化を先取りするには 人と話すことが大切

原田 現在の仕事を始めたきっかけは何ですか？

鈴木 子どもの頃から、ものを書いて人を楽しませるのが好きだったんです。小学校6年のときには、僕が芝居の台本を書いて発表会で演じたらすごくウケました。中学1年では、小説が地元の新聞に掲載されたのを覚えています。

また、僕が小・中学生だった1980年代はテレビからスターがたくさん生まれた時代で、そんな世界に憧れがあったんです。その後、放送作家という仕事があることを知り、「自分もテレビやラジオに関わりたい」と思い、大学生になると放送作家の前田昌平さんの門をたいて弟子になりました。

張 当社グループが目指す企業像の中に、「常に変化を先取りして新たな価値を創造する」という言葉があります。変化が激しいエンターテインメント業界でどのように「変化の先取り」をしているのですか？

鈴木 はやっているものや、はやり始めているものを、世の中の空気を感じていかにすくい上げるかが大事だと思います。

僕自身心掛けてるのは、業界に関係なくいろいろな人と話すこと。

10年前くらいにテレビ朝日の『帰れま10』という番組を作ったときのことです。知り合いの社長に「働く女性がアフターファイブに何をしているか」とクイズを出されたんです。実はその会社でアンケートを行ったところ、「居酒屋でご飯を食べる」のが1位だったと聞きました。当時、居酒屋チェーンがおしゃれになり、ニューアルしてはやり始めた頃でしたが、まだどのメディアでもそれほど取り上げていない時期です。そこで、一つの居酒屋をクローズアップして、メニューの人気ベスト10を当てるまで帰れないという番組を考えました。業界以外の人からのヒントで、今も続く人気番組が誕生したというのは、自分の中でも大きな経験でした。

フィールドを広げれば 新しいものが見えてくる

平木場

人と話すことで、スランプを乗り越えたこともあったのでしょうか？

鈴木 19歳から放送作家を始めて、けいこっぴつ番組も出させていたかったです。それが10年目にドラマをやってみると、なかなか通用しない部分もあり、この先、自分が書いたもので、人を笑わせることができるか不安になったんです。

そんなときに、売れてはいないけれど面白いお笑い芸人たちを集めて舞台を始めました。彼らと話すことで、それまで得られない情報が入るようになり、いろいろな人と話すことって大事だなと気づきました。自分一人では情報の限界がありますから、フィールドを広げること苦しいときを乗り越えられました。最近では力士と仲良くしていたり、大学生の起業家やYouTubeと食事する機会もあります。

育休の時期があったからこそ 今も子どもとの距離が近い

張 常に情報収集をしていると、オフの日がないのでは？

鈴木 ないですね(笑)。性格だと思っんですが、ずっとオンの方が楽しいです。

原田 面白いと思うことが仕事になっていくわけですね？

鈴木 常に、自分の中に俯瞰の力×アがもう一台ある感じです。子育てしていても、同じですね。奥さん(注：お笑いタレントの大島美幸さん)に怒られていても、45歳のいい年をした自分ですごく怒られているのがおかしくて笑っちゃうんです。そうすると、余計に怒られるんですが(笑)。



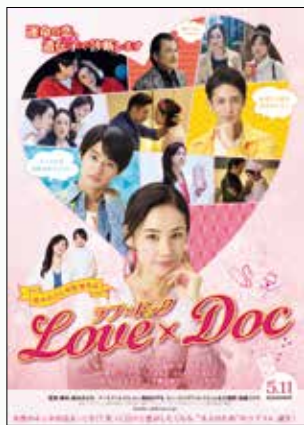
平木場 私も2人子どもがいるのですが、お子さんが生まれてから働き方は変わりましたか？

鈴木 奥さんが妊娠で休んでいたときに待っていてくれた仕事関係の方たちのためにも、早く仕事場に返してあげたかったのと、子どもが1歳までは僕もなるべくそばにいてあげたいと思い、放送作家の仕事を休む育休を取りました。

実際には、育児というより奥さんに料理を作ることが多かったですね。母親って、時間がないから自分の食事はびっくり飯だったりす

鈴木おさむさんの初監督映画

『ラブ×ドック』
5月11日より全国公開中



©2018「ラブ×ドック」製作委員会
配給:アスミック・エース

「恋がしたい。ときめきたい。でも、もう恋で失敗したくない。」そんな女性の恋愛を、遺伝子レベルで導くクリニック、「ラブドック」。笑って、泣けて、恋がしたくなる“大人のための”ラブコメディです。鈴木おさむさんが自ら書き下ろし、監督した話題作。

出演:吉田羊、野村周平、吉田鋼太郎(特別出演)/玉木宏ほか

インタビューを終えて

■どんな質問にも面白く答えてくださって、終始爆笑のインタビューでした!新しいアイデアを泉のように湧き出させる秘訣はもちろん、ご家族がいらしてこそできた作品の裏話もお伺いでき、まさに相乗効果だなと思いました。(平木場)

■鈴木さんのお話は分かりやすく、良い経験になりました。新しいヒット番組を作る秘訣は「外を知る、業界外の人のお話をたくさん聞いてヒントを得る」とのこと。新規ビジネスの開拓にとっても参考になりました。(張)

■世の中の「面白いこと」に常にアンテナを張っておられ、インタビュー中にも「それ、何ですか」と興味をそられる話題がたくさんありました。ついつい見ちゃうテレビ番組を作り出す源は、まさにそれなのだなと感じました。(原田)



トしたんです。すると、「このイントロなら劇中で使いやすいから」とこだわってくれて。ですから、すごく音楽との一体感があると思います。

他に、アートアクアリウム(金魚などが水槽で泳ぐ様子を芸術的に表現)アーティストの木村英智さんや友情出演してくれた役者さんなど、たくさんの友人に力を借りました。持つべきものは友だなど(笑)。

今まで培ってきた人脈や経験が生きた作品になりました。

**テレビは過渡期
これからの変化に期待**

張 科学技術と芸術・文化は共に社会の発展に欠かせないものですが、科学技術がこれだけ進化した今、この先の芸術・文化はどのようになると思いますか?

鈴木 僕らが慣れ親しんでいるインターネットの多くは戦後に発展したものです。その最たるものがテレビであり、そこで放映される番組は日本人の文化にまで

なりました。ところが、さらに科学技術が進化してスマートフォンが誕生し、携帯電話でテレビが見られるようになったため、その楽しみ方も変わり、放映権の問題も含めていろいろ課題が出てきています。ですから今はテレビの過渡期であり、卵の殻がむけるような時期。これから面白いんじゃないでしょうか。

原田 最後に住友商事社員に何かメッセージをお願いします。

鈴木 世の中には才能ある人って

たくさんいると思うんですが、そういう夢見る人の背中を多方面から押す企業であってほしいと思います。野球に例えると、僕の場合は19歳から23歳の若い頃に番組のプロデューサーが打席に立たせてくれたんですが、才能があっても打席に立てなければ打てないですよ。ですから、いろいろな分野の仕事を手掛けている住友商事のような会社が、才能ある人が打席に立てるようなチャンスをつくってあげてほしいですね。

るでしょ。そこで、煮物の作り方をなどを勉強しました。

彼女が仕事に復帰してからは、強制的に子どもと二人になりますよね。任されるうちに自分もだんだん父親として自信が生まれてきました。また、子どもが寝た後、深夜に書き物をしたりできるようなになりました。

そういう子どもとの密な期間があったので、自分が仕事を再開してから子どもとの距離感が近いです。今は仕事もぎゅっと凝縮してやるようになり、飲みにも行きますけど、生活のサイクルが変わりました。前は仕事が最優先でしたが、家庭ができてからは仕事は2番目。嫌なことがあっても、家があつて子どもがいるという安心感があるからどんなことも受け流せる。そういうのは精神的に大きいですね。

平木場 「ラブ×ドック」は、笑って泣ける映画で楽しく拝見しました。初監督作品で女性のラブストーリーを選んだ理由は?

鈴木 テレビドラマでは大人の女性が主人公の物語がたくさんあるのに、映画では少ないと思います。僕は、30代の女性をメインにしたテレビの恋愛「ソントや恋愛」メデイが好きで、いつか大人の女性の映画を作りたいと思っていたのでこの脚本でした。



見る人によって、「こんなことないよ」という部分と、「すごく分かる」と共感する部分がある。いろいろな女性の現実をパッチワークしているの、見た人が自分を投影して見られる部分があると思います。そして、主人公の生き方に何か希望を見いだしてもらえたらうれしいですね。

原田 音楽も印象的で、音楽と一緒に物語が盛り上がっていく感じがいいですね。

鈴木 音楽ディレクターをお願いした加藤ミリヤさんに「主題歌を、絶対に劇中でかけたい」とリクエスト

大人のためのラブコメ
初監督の『ラブ×ドック』

鈴木 実は公開中の映画「ラブ×ドック」は奥さんが妊娠中に脚本を書いたんです。恒例だった正月旅行に行かず、1月1日から何か新しいことをしようとして書き始めたのがこの脚本でした。



平木場 女性の恋愛心理はどのよう探究するのですか?

鈴木 以前、フジテレビで「コリコミフルタイプ」という番組を担当していたとき、毎週届く何千通という投稿に目を通していました。7~8年毎日続けている自分のブログでも「本気で浮気したことがある女性は何れくらいいますか?」などと質問すると、みんなすごく教えてくれるんです。ですから、今回の映画は見聞きた恋愛の蓄えをもとに、自分がテレビでやってきた面白いコメディタッチのものを

日本で10代をターゲットにしたキラキラ恋愛映画が出てきたのは15年くらい前です。それを見てきた人たちは、いま30代。彼女たちが見なくなる作品があってもいいのではないかとも思い、今回のテーマを選びました。

作ろうと思いました。

原田 今回の作品は、女性にとつてはリアルな部分が詰まっていますよね。

鈴木 そうですね。吉田羊さん演じる主人公が経験する3つの恋愛話ですが、例えばそのうちの二つが職場の上司との恋愛。上司が主人公の才能を褒めると彼女は喜ぶけれど、実はそれは上司が恋愛がしたいがための手段だった……なんて、すごくリアルですよ。

また、大久保佳代子さんは主人公の友人でシングルマザー役。子育てと仕事で頑張っていると、フットワークの軽い独身の主人公に好きな人を取られてしまうというのも、リアルですよ。